法隆寺昭和資財帳関連の調査

歴史研究室・平城宮跡発掘調査部

当研究所は，法隆寺が行っている昭和資財帳作成事業の一環として，同寺の依頼をうけ1982年以来，各種の調査を行ってきた。以下，1986年度に実施した調査の概要を記す。

1　百萬塔の調査

考古第一調査室は，史料調査室と共同して百萬塔の調査を継続してきた。今年度は相輪部4,000基の調査を進める一方，既に当研究所のパソコン（IBM 5550）に入力済の塔身部3,000基のデータ処理を実施している。その成果の一部を紹介する。

(1)　工人名簿の作成　塔身部の墨書銘をもとに左右工房別に工人名簿を作成し，工人ごとの製作台数を把握した。塔身部製作工人は今のところ総数173名を数える。内訳は左工房75名，右工房76名，帰属不明22名である。姓と名を記す者もかなりの数に達するが，多くは名のみを記す。姓名とも判明した工人数は右工房では6割を越すが左工房では1割に留まる。最も作品数の多い工人は右工房の丈部造伊波（はせつかべのみやつこいなみ）で，3,000基中61基を数える。

(2)　工人使用の轆轤　轆轤は台ごとに鉄爪の形が違う。爪の形の分類により，使用轆轤の台数を復原しえよう。この観点から，工人ごとに塔身底面の爪跡を整理し，同一轆轤の使用期間，爪跡の変化過程を明らかにした。爪形は数日で変わるものから，数ケ月変わらないものまである。この変化は，鉄爪の折損など轆轤の故障に起因する場合もあるが，工人相互の轆轤の使い分けや，工人の出仕状況に密接に係わるものと，予想している

(3)　銘文位置の変化　塔身部の墨書銘は多くが底面にあるが，笠上面に記すものが1割ほどある。この笠上墨書は天平神護三年（767）の上半期，左工房を中心に流行した記載法である。この事実は，左右の工房が各々独自に製品の検収や，工人の日々の製作数の確認作業を行っていた可能性を，示唆する。

(4)　製作技術の変化　塔身部の底面調整には轆轤削りと，ノミ削りの二通りの方法がある。轆轤削りは当初からの一般的な方法で，数が多い。これに対しノミ削りは全体の13％にすぎない。ノミ削りの墨書銘は，8割が製作年月日の不明品であるが，残りの2割はすべて神護年間（765～767）に属する。これは765年から770年と推定できる百萬塔製作期間の前半期にあたる。こうした事実をもとに考えると，ノミ削り調整は神護年間を中心とするものであり，製作年月日を明示しない簡略記載の墨書銘は，神護年間を中心とする古い記載法の可能性が高い。

(5)　印刻数字の性格　基壇側面には小さな「一」「二」「三」「#」の印刻がある。通説では，塔内に納めた陀羅尼経の巻数を表示したものという。しかし，この印刻数字は法隆寺百萬塔に幾度か認める生産のピーク時に，特定の数字が伴なう。このことから，印刻数字は百萬塔製作時の製品の収蔵保管状況，陀羅尼経の納経作業，各寺への配分計画などと密接に関連したものと考えている。

（松村恵司）